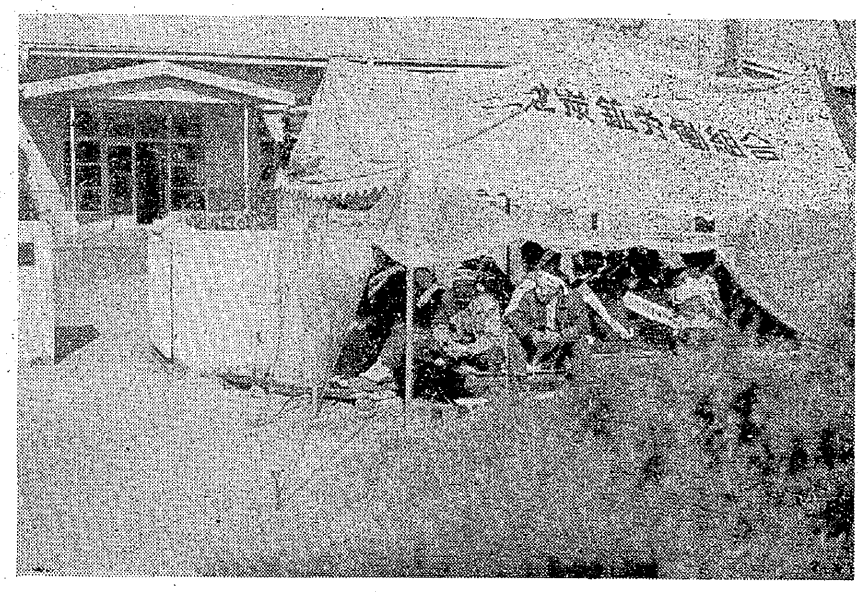

# 遺族との交流が提起したものは？

別項記事にもあるように、先に各職場分会は、三井鉱山に重大な要求を出して闘った三池遺族会と交流、そして支援体制を固めていった。さて、交流の実態はどうだったか。ここに、一組合員から寄せられた率直な声を紹介し、こんどの闘いに役立てたい。

## 何が三池の闘いなのか
### 別のものでない遺族の労苦

交流で、アソニットや三池縫製に働く遺族たちの実態がよくわかり、私の分会でも、事実を職場新聞に書いて広げたり、両会社への抗議、闘う遺族を激励することがきまったわけです。

ところが交流会の実態はといえば、分会で全員参加をきめたにもかかわらず、実際に集まったのはその何分の一かに過ぎず、その時刻になると、『ちょっと用事ができたから』など、いろんな理由をあげて帰ってしまう。

**誘致工場の一つ、三池縫製工場正門前での座り込み。**

なかには『遺族問題も大切だろうが、まず自分たちの問題こそさらに大切ではないか』という人もいる。

聞けば職場でめんどうな仕事をするのに、三十三、四歳という人がもう老眼鏡をかけながらの作業だといいます。トイレにいけば、仲間たちからさえ「あの人はいつまでも、何ばしよらすとじゃろか」と変な目で見られる。

ですから、あの人たちは交流から家に帰ると疲れてしまって、もう新聞も、テレビも見たくなか、ということでしたが、よくわかる気がしました。

一方私たち組合員の側に見る傾向は、年に一回の〝まなぶ〟との切ってかけつけなければならない時刻です。それに、私たちにすれば何年に一回かの交流でも、遺族たちにすれば大変なはず。

その遺族たちは、こんどは交流が終ってからはじめて買いものをして、それから家に帰ってごはんをたき、たべ、フロにいき、そしてさびしく寝るという人がほとんどでしょう。

交流では、さかんに「三池闘争のときは、こうこうしてがんばったバイ」と、それこそ目を輝やかしながらうったえておきながら、その人の実際ははたしてどうか。情勢の困難な今こそ、団結してがんばらんならんというとき。もういっぺん、三池の闘いを考え直す必要があるとじゃなかですか。

# 先にやることをやれ
## 新港で交流会　宮原社宅合理化許せぬ

十一月二十八日新港闘争本部にて、宮原社宅合理化反対闘争で今後闘いを進めるため、宮原地域分会、新港三川・同港務の両地域分会、主婦会分会の交流が催されました。

宮原地域分会の平川分会長から経過説明のあと、新港地域での百八棟問題をめぐる闘いの経験なども明らかにし、話し合いました。

――低賃金で働かせ、ウサギ小屋みたいな所に住まわせ、ただメシを食って寝るだけの生活をさせている。子供の遊び場の整備はせず、野犬も多い。宮原社宅は、安心して住める状態ではない。

――会社は社宅の移転を計画する前に、人間としての豊かな生活をされる社宅環境づくりが必要。

――学校生徒の話によると、新港の住民を小川開アパートに移転させるとのうわさもあるが。

――人間としての権利を生かすにも、こんどの合理化を許すわけにはいかない。宮原社宅合理化は、新港の立ち退き問題にもつながっている。

**新港地域闘争本部での、宮原地域分会代表を迎えての交流。**

――会社の一方的なやり方にはまったく反対だ。

×

お互いに支援し合い、がんばって行こうと誓って交流を終えました。

（この項三川＝桃島敬三記）

# 総評の動きに、職場から疑問

このたび、総評中央のいまの動きに対して、どうも疑問だという「一組合員」の投書をいただきました。重大な問題ですから考えてもらうために、原文のまま次に紹介します。

## 投書
# 宗教政党との共闘はどうか
## 三池闘争をどう考える？
### 一組合員

ことし十一月二十一日の朝日新聞朝刊は、「労働界に政治の季節」と題して、総評の槇枝議長が十六日公明党の竹入委員長との初のトップ会談で、共産党抜きの政権構想を進める立場を鮮明にしたと報じている。今度の総選挙結果が、社会党―総評ブロックにとって深刻だったようで、これまで社会党を支持してきた総評主流の「あせり」が一層つのる形になった、とも書いている。それが、公民中道陣営への接近となって表われたのだろう。

これに対し共産党は、総評の右寄り傾向を批判し、労働運動の「右傾化、反共化の危険」として重視しているという。

また、読売新聞（十一月二十一日）に報じられているように、総評が国際自由労連に志向していく「変身」ぶりには、総評内部からも「どこまで右カーブを切ればすむのか」、という危惧、不安が多いという。

私たちの職場でも、このことが話題になったが、次は仲間の声……。

Aさん「総評が右傾化するのは困る。革新を希望する労働者にとって、前途に不安を感じる。これでは、社会主義指向のバラ色の虹も消える」

Bさん「先日総評内のある組合が、総評脱退（？）の発言をして企業に対して、六十歳までの定年延長をもらうかわりに、五十歳から十年間昇給ストップを許すという、政府のもくろむ厚生年金の六十五歳受給につながる協定を結んだとか、聞いてもいるが……」

Cさん「労使一体で、自民党ベッタリの姿勢だ」

Aさん「総評が右傾化すると、ゆくゆく企業ベッタリになるのではないか」

Bさん「われわれの三池労組は六〇年安保とともに、企業合理化反対で闘った。もちろん、総評傘下の全国の仲間の援助があったからこそ、できたことだ。が、あの反合の闘いは間違っていたのか。そうであれば、第二組合の分裂は正当化されるのではないか」

Aさん「間違ってはいない。反合の闘いは、労働者の生命と暮らしを守るものだ」

Cさん「しかし、総評の上部が右傾化を強めるなら、われわれの闘いは苦しくなる」

Aさん「総評は革新の旗をしっかり立てて、いろんな感情をのりこえて、共産党との共闘も強めるべきだ」

Bさん「総選挙で少し敗けたくらいで、おたおたするなといいたい」

×

職職の仲間の話を聞いて、私は考えた。総評が、宗教を地盤としながらできている政党と共闘するのは、間違っていると。

歴史上から見ても、宗教団体は時の権力者につきやすいのだ。それに、総評下部組織の組合員には共産党員も多い。共産党は、宗教を地盤とする政党より友党であらねばならぬ。これを疎外すれば、総評内部の分裂も懸念される。総評の今日の動きは、重大問題だ。

夢がふくらむ＝みかん狩り＝

# みかん狩りは楽し――
## 指導部統一行事
### 港務指導部　木下　章

十一月十一日、昨日までの雨が嘘だったように晴れた。皆が待ちわびた、港務指導部の統一行事〝みかん狩り〟の日だ。

快晴の上に、小春日和に近い暖かさ。大牟田郵便局前を午前九時に出発した貸切りバスは、途中参加者を拾いながら、国道二〇八号線を一路南下する。近くの丘の木々は穏やかに紅葉をはじめていた。

組合員と家族、それに退職者の会の皆さんなど総勢四十五名。車の中は和気あいあいの雰囲気で、お互いの消息を話し合ったりして絶えず談笑の渦が湧く。

そのうち退職者の会の田中敏さんが、例年の如く〝オロロンバー〟なるものを開いて万座を盛り上げる。バスの前部の席は色とりどりのリボンやテープで飾られ、田中さんはそれをバックに、純白の背広の胸ポケットに真赤な布をのぞかせたパーティスタイルで、ウイスキーを注いでまわる。

カラオケのマイクで若い女性がうたう頃、バスは伊倉、天水をすぎ、やがて目的地の河内に着いた。有明海を眼下に見おろす丘陵一帯は、今を盛りの黄色にみのったミカン畠であった。

某みかん園に入場して、たわわに実が稔ったみかんの樹々の間を徘徊して、みかん狩りをした。艶やかな、もぎたてのみかんの、甘ずっぱく口に拡がる新鮮な味。

子供たちはハシャギまわって、みかんを千切る。

みかん狩りは一時間程で切り上げ、一同は再びバスにのり玉名温泉へ。

紅葉館の別館で中食をかねた宴会をひらく。野田指導部長と大石（主婦会）港務指導部長、それに退職者の会の黒田港務支部長の挨拶のあと、乾杯のビール。

酒とビールがほどよくまわると、再び退職者の会の田中さんの登場。彼の演出するプログラムで夫婦の愛情テスト（風船を夫婦の胸で割る）や、トイレットペーパー解き競走など、つぎつぎと多彩な行事が行なわれた。

退職者の会の先輩の皆さんもハッスルしてマイクを握り、ナツメロが飛び出した。

みんなで語り、みんなで飲む楽しい団結旅行は、最後に団結ガンバローをうたい、来年の再会を誓って終った。

☆　☆